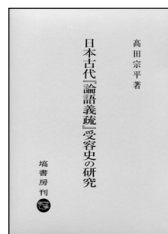


詳細を極める文献書誌・研究資料集

影山 輝國

高田宗平著
日本古代『論語義疏』受容史
の研究



A5判 444頁
塙書房
[本体 13500円 + 税]

まず、目次を挙げて、全体の構成を示そう。

序章 日本古代中世『論語義疏』研究序説―先行研究

の整理と本書の分析視角―

第一節 日本古代中世の『論語義疏』に関する研究の現

状と課題

第二節 本書の分析視角と漢籍受容史研究の提起

第三節 本書で使用する旧鈔本『論語義疏』の書誌事項

第一章 『令集解』所引『論語義疏』の性格―「五常」

の条をめぐって―

第一節 先行研究とその問題点

第二節 『令集解』の文献学的問題

第三節 『令集解』諸本所引『論語義疏』の比較検討並

びに校勘

六世紀、皇侃によって書かれた『論語義疏』は、六朝論語学の粹を集めたものでありながら、南宋のころ広大な中国大陸では悉皆姿を消し、日本にだけ完本として伝わった、と聞くだけでもロマンが感ぜられるが、このロマンに魅せられた人々がいる。一八世紀前半の根本遜志、二〇世紀前半の武内義雄、二〇世紀後半以後の高橋均である。この三氏は『論語義疏』の出版・校定・研究に顕著な足跡を残された。現在、評者もつたない歩みを進めているが、それを追い越して若い学徒が一つの成果をまとめた。

この本は端的に言えば、『論語義疏』がいつ日本に伝わったのか、どんな人々がそれを読み利用したのか、今残る何本かの鈔本はいかなる性質をもったものかなどを綿密かつ詳細な方法で考究したものである。

第四節 『令義解』所引『論語義疏』と他の典籍諸本所

引『論語義疏』との相異

第二章 『弘決外典鈔』所引『論語義疏』の性格

第一節 『弘決外典鈔』の特徴と身延文庫所蔵二本の書

誌事項

第二節 『弘決外典鈔』所引『論語義疏』と旧鈔本『論

語義疏』との比較検討

第三節 『弘決外典鈔』所引『論語義疏』と旧鈔本『論

語義疏』との相異の要因

第三章 『政事要略』所引『論語義疏』の性格

第一節 大阪市立大学学術情報総合センター・福田文庫所

蔵『政事要略』の書誌事項

第二節 『政事要略』所引『論語義疏』と対応する諸旧

鈔本『論語義疏』の比較検討並びに校勘

第三節 『政事要略』所引『論語義疏』・『小野宮年中行

事裏書』所引『論語義疏』と旧鈔本『論語義疏』

との相異

第四節 『政事要略』所引『論語義疏』・『小野宮年中行

事裏書』所引『論語義疏』と敦煌本『論語義疏』

との相異

第四章 『令義解』・『上令義解表』注釈所引『論語義疏』

の性格

第一節 『令義解』の主要な写本

第二節 『令義解』・『上令義解表』注釈所引『論語義疏』

と旧鈔本『論語義疏』との比較検討

第三節 『令義解』・『上令義解表』注釈所引『論語義疏』

と旧鈔本『論語義疏』との相異

第五章 日本古代に於ける『論語義疏』受容の変遷

第一節 日本古代典籍に見る『論語』注釈書受容の諸相

第二節 日本古代に於ける『論語義疏』受容の諸相

補論 藤原宇合の『論語』受容に関する一試論

——『懷風藻』所載宇合詩序を手がかりに——

第一節 藤原宇合の略歴

第二節 『懷風藻』所載藤原宇合詩序二篇の検討

第三節 『懷風藻』所載藤原宇合詩序二篇の文飾に供さ

れた『論語』

藤原宇合周辺の漢籍——むすびにかえて——

終章 結論と今後の展望・課題

第一節 本書の結論

第二節 今後の展望と課題

跋語

索引

（各章に置かれた「はじめに」・「むすびに」及び節の下位分類である「項」は省略した。）

現在、『論語義疏』の鈔本は三六本の所在が知られているが、いずれも室町時代以降に書写されたもので、確実に鎌倉・平安時代まで遡り得るといえるものは一本も無い。こうした状況下で、日本古代における『論語義疏』の受容史を調べようとすれば、必然的に日本古代の文献中に引用されたり、言及されたりした『論語義疏』を調査するしか方法はないのである。そしてその試みはこれまでもなされてきた。しかし、著者は従来の方法に飽き足らなかつた。なぜなら従来の研究は、日本古代の古典籍を調べる際、近代になって出版された活字本を用い、最古・最良の原本を無視しているからであった。最も良質のテキストを用いて調べ直したら、新しい発見があるのではないか、これが著者の出発点であつたろうと思われる。著者は『義疏』の引用のある古代文献として、『令集解』（第一章）・『弘決外典鈔』（第二章）・『政事要略』（第三章）・『令義解』『上令義解表』注釈（第四章）を取り上げる。

『令集解』は、国史大系本を用いる研究者が多い中、著者はこれを断然拒絶して、国立歴史民俗博物館所蔵田中本・宮

内庁書陵部所蔵鷹司家本・国立国会図書館所蔵清家本・国立公文書館内閣文庫所蔵紅葉山文庫本・宮内庁侍從職所管東山御文庫本・京都大学総合博物館所蔵『旧抄本経書』、以上六つの写本すべてを用いて比較考察する。

さて、『令集解』に引用される『論語義疏』は全部で二三か条あり、そのうち四か条が「五常」に関する疏文である。著者はその四か条を前述の六つの写本を用いて校定した。苦労して作られた校定文だが、評者がそれを国史大系本と比べると、全く同文となっている。ただ四か条のうち三番目の条で、「照」が「明」になっているだけの違いであり、これは六つの写本もすべて「明」に作り、しかも国史大系本は「明、下文及論語義疏作照」と頭注を付けていて、国史大系本の優秀性を示す結果になっている。だからといって著者の努力が徒勞であると言っているのではない。いいかげんな活字本が横行している今日、著者の作業はまさしく王道なのである。著者はこうして得た「五常」条の校定文と、『令集解』以外の古典籍に引用された『論語義疏』「五常」条文との比較を行う。その際に用いられたものは『秘密曼荼羅十住心論』・『般若心経秘鍵開門訣』・『性霊集注』・『悉曇輪略図抄』・『秘密宝鑰勘註』・『五行大義』裏書・『聖德太子平氏伝雜勘文』・『太子伝玉林抄』・『論語抄』に加え、鈔本『論語義疏』と敦煌本『論

語疏』であり、しかもそれぞれ最善のテキストを用いている。どんなテキストを用いたか、一々挙げきれないので、どうか本書を開いて見ていただきたい。室町鈔本『論語義疏』については、応永三四年本・文明九年本・清熙園本を用いたことは首肯できる選択である。さて比較の結果、「五常」条文中

「人稟此五氣」に作るグループ（『令集解』、『秘密曼荼羅十住心論』など）と「人稟此五常」に作るグループ（室町鈔本『論語義疏』、敦煌本『論語疏』など）に分類され、「五氣」に作る典籍は「五常」に作る典籍よりも相対的に古いことが明らかにされる。高橋均氏も既にこれに気づかれ、伝写の過程で「五氣」を「五常」に誤ったと推論されたが、著者はそれを単なる誤写によるものではなく、何らかの思想的背景を想定すべきであるとした。この点については著者自身も自覚していること

くさらに詳しい考究が必要であろう。ともあれ平安時代初期の成立である『令集解』・『秘密曼荼羅十住心論』に引かれる『論語義疏』は唐鈔本に由来すると考えられ、「五氣」と「五常」の小違はあれ、室町鈔本『論語義疏』も唐鈔本に由来すると著者は結論づけられた。

『弘決外典鈔』に引用される『論語義疏』五か条を検討する際にも、著者は最古の平安時代写本（天理図書館所蔵『五臣注文選卷二十』紙背）を含めた五種の写本・版本を準備する。詳細な比較の結果は、『弘決外典鈔』所引『論語義疏』と室町鈔本『論語義疏』は大局的に見て、本文系統を異にすると言い得るような相違はない。したがって『弘決外典鈔』所引『論語義疏』もまた唐鈔本に由来するという。

□新刊□

唐寅

内山知也 監修
明清文人研究会 編

明代中期に蘇州で活躍した文人唐寅（伯虎）。詩書画に巧みで自由奔放に生きた唐寅を様々な角度から徹底的に研究。序／唐寅の生涯と蘇州文壇／交友／詩と詩論／詞／散文／曲／演劇／書／絵画／年譜／参考文献 ■4000円

日本語と中国語のモダリティ

日中対照言語学会 編

日中対照研究、中国語研究を中心に日本語の意味階層構造とその中でモダリティの位置づけを論じた研究、日英比較からの視点で論じた研究を含む14編 ■2800円

動詞を中心にした中国語文法論集

荒川清秀 著

日本人の目を通して、中国人には見えない中国語の言語事実と法則を追究する。そこには豊かな中国語の世界が広がる。著者四十年來の文法研究成果の集大成。 ■4500円

ことばの散歩道VI きょうは漱石あしたは魯迅

上野恵司 著

I 魯迅小説語彙拾零―仕掛けがいっぱいの魯迅の文章を読み解く。
II 漱石用字・用語補記―前集「ことばの散歩道V」《我是猫》誤訳・名訳・珍訳の続編を収録。全57話、コラム72編。 ■1600円

白帝社

※価格は税別

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

『政事要略』が他の書を介さずに直接引用する『論語義疏』は三か条ある。その三か条について、本文を確定するため室町鈔本三本を比較した結果、文明九年本に多くの誤写・脱字を認めたという。この指摘は全く同感である。評者は現在三六本の鈔本すべてを用いて校勘作業を行っているが、文明九年本だけが他の鈔本と異なる場合が少なくないのである。

武内義雄氏が定本を作る際、このやや特異ともいえる鈔本を底本にしたことに対して疑念を呈せざるを得ない。さて著者は九本の『政事要略』を調査し、そのうち最善と思われる大阪市立大学学術情報総合センター福田文庫所蔵本を選定し、先に確定した本文と比較する。その結果、『政事要略』には室町鈔本『論語義疏』には無い「中国結髪而衣衽向右夷狄被領而衣衽向左」の句が有ることを指摘する。高橋均氏は『政事要略』の撰述者により、補い書き換えられたものと推定されたが、著者は醍醐寺所蔵文永五年鈔本『論語集解』裏書にも同文が見られることから、補い書き換えられたものではなく、室町鈔本『論語義疏』では佚した、旧態を遺存する『論語義疏』の引用文ではないかとの見方を示された。傾聴に値する見解である。

『令義解』『上令義解表』注釈には一か条の『論語義疏』が

引用される。紅葉山文庫本と廣橋本を用いて室町鈔本『論語義疏』との比較検討を行っている。その際、「也」の有無によって旧態を存するか否かを判定されているが、これは極めて危険なことと愚考される。文末「也」は、書写の際に行数や字数の調整のため、恣意的に添削されることが多く、これを以て鈔本の系統を推定するのは極めて困難であるからである。

第五章は、『論語義疏』がいつごろ伝来したのか、どんな人物がそれを読み、利用したのかをまとめ、補論は、『懷風藻』に載せられた藤原宇合の詩の序に『論語義疏』の文辞が用いられた可能性について検討し、終章は、本書の結論と今後の展望・課題をもって締めくくっている。

以上、章を追って本書の内容を紹介したが、最も特徴的なことは、取り上げられた典籍に関する書誌と先行研究とが極めて詳細に提示されていることである。そのため注の分量が並大抵ではない。第一章などは本文よりページ数が多いのである。

いつの日か細部に宿る神が更に輝かしい姿で出現するであろうことを期待する。

(かげやま・てるくに 実践女子大学)